

## 四旬節第1主日

第1朗読 申命記 26・4-10

第2朗読 ローマ 10・8-13

福音朗読 ルカ 4・1-13

2025.3.9 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
イエズス会 アン助祭

今日のルカ福音書は、イエスが公の活動を始める前に荒れ野で誘惑を受けられたことについてわたしたちに語っています。

「荒れ野の誘惑」と聞くと、イスラエルの民がエジプトから解放された後、約束の地に入る前に約40年間砂漠で過ごしたことを思い出すでしょう。イエスは、イスラエルの民と同じように荒れ野の誘惑を経験しましたが、イエスは、イスラエルの民とは異なり、新しい態度、新しい精神で誘惑に立ち向かいました。

わたしたちも、イエスのこの態度から学ぶことができると思います。

イエスは、40日間砂漠で何も食べませんでした。そのため、その期間が終わると、イエスは空腹を感じました。すると、悪魔が現れ、「もし神の子なら、これらの石にパンになるように命じたらどうだ」と誘惑しました。確かにパンは生きるために欠かせないものです。人は自分の命を支えるために、必ずパンを手に入れようとするでしょう。イエスはそのような状況に自らを置かれました。しかし、イエスはその機会を通して、「人はパンだけで生きるものではない」と教えました。「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、実はモーセが砂漠で飢えたイスラエルの民に語った言葉でもあります（申命記8・3）が、今やイエスはそれを繰り返しました。それを通して、人間の命がパンだけによるのではなく、父なる神によって支えられていることが明らかにされました。また、何よりもすべてを父なる神の手に委ねることが必要であることを示されました。

そして次に、イエスはもう二つの誘惑を受けられました。一つはこの世の権力と名誉を求め、「この国々の一切の権力と繁栄を与えよう。…もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる」という誘惑です。もう一つは、自らの力を誇示する誘惑、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうですか？」というものです。しかし、こうした誘惑に直面したとき、イエスは父なる神を愛し、神に仕え

るという模範をわたしたちに示してくださいました。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」（申命記 6・13、10・20）と。

皆さん、今日、四旬節の始めにあたって、イエスが誘惑を受けられたことを思い起こすことには深い意味があると思います。わたしたちは、誘惑との戦いにおけるイエスの姿に、多くの支え、慰め、そして希望を見出します。

イエスが受けられた誘惑のような、神から引き離そうとする誘惑は、今なおわたしたちの心の中や、わたしたちが生きている社会の中でもさまざまな形で起こっているのではないのでしょうか。しかしそれでも忘れてはいけないことは、イエスが誘惑に打ち勝ち、さらに、この誘惑との戦いの中で、イエスはどのように誘惑に立ち向かうべきかをわたしたちに示してくださいました。

つまり、イエスは、すべてを父なる神の手に委ね、神のみことばのみに力を求めました。それは、誘惑との戦いにおけるイエスの姿を黙想するときにわたしたちが学べることです。

また、第2朗読の「ローマの教会への手紙」の中で、「主を信じる者は、だれも失望することがない」（ローマ 10・11）と聖パウロはわたしたちを励ましています。誘惑に打ち勝つ力、それはわたしたち自身の力ではなく、神がイエス・キリストにおいて与えてくださるものです。神は、この世におけるわたしたちの旅の中で、絶えず一人ひとりに必要な恵みと力を注いでくださっています。特に、愛である神を示すイエスの言葉や秘跡などにおいて、わたしたちはその力を豊かに見出すことができます。

すでに始まった四旬節において、わたしたちが霊的な戦いのためにこの力を深く深め、イエスと共に受難の神秘に与り、復活の喜びを分かち合うことができるよう祈りましょう。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>